

令和6年度研究推進計画

海田町立海田西小学校

1 海田西中学校区 研究主題

主体的に学びを深める児童・生徒の育成
～問題解決的な学習の実現・改善を通して～
育てたい資質能力 メタ認知・コミュニケーション力・主体性

2 海田西小学校 道徳科研究推進テーマ

自己の生き方についての考えを深める児童の育成
～道徳的価値の理解をもとに、自己を見つめる発問の工夫を通して～

3 主題設定の理由

(1) 主題設定の背景

現行学習指導要領（平成29年告示）において、道徳の時間は、子どもたちが道徳的な課題を自分自身の問題と捉え、向き合う「考える道徳」、「議論する道徳」へと質的転換を図ることが求められている。そのためには、どのように学ぶのかという学びの過程に着目してその質を高めていくこと、すなわち主体的・対話的で深い学びを実現するために、指導を改善することが必要である。児童が、様々な事象を、道徳的諸価値の理解をもとに自己との関わりで広い視野から多面的・多角的に捉え、自己の人間としての生き方について考えるという「道徳科」の見方・考え方を働かせ、主体的・対話的で深い学びを実現することにより、児童の道徳性を育むことができると考える。

(2) 児童の実態

昨年度末のアンケート調査によると、「自分にはよいところがあると思う。」という質問に対し、本校の児童の肯定的回答の割合は81.8%と、他の質問に対し低い数値であった。また、「自分のよさは、周りの人に分かってもらえていると思う。」という質問に対しては、肯定的回答の割合が76.0%とさらに低い数値であった。本校児童は、自己の長所を認識したり、友だちの長所を認めたりすることに課題があるといえる。

同アンケートによると、「道徳の授業が好きである。」という質問に対して、肯定的回答の割合は75.2%、「道徳の授業で意見を言ったり聞いたりすることは楽しい。」という質問に対して、肯定的回答の割合は75.8%と、全体として道徳の授業への受け止めがよいとはいえない。また、「道徳の授業では、学習を自分のこととして考えていると思う。」という質問に対して、肯定的回答の割合は88.4%、「道徳の授業で学んだことは、いつもの生活に生かせていると思う。」という質問に対して、肯定的回答の割合は81.5%と、道徳的価値の理解を自分の関わりで深めたり、道徳的価値に関わる事象を自分自身の問題として受け止めたりすることへの難しさを抱える児童がいる。

(3) 教師の願い

海田町では、「心の元気プロジェクト」を掲げ道徳教育の推進に取り組んでいる。本校でも、道徳

教育推進教師を中心に、指導方法や評価等について校内研修を行ってきた。しかし、道徳の授業において困っていることについて尋ねると、「中心発問を考えることが難しい。」「繰り返し発問ができなくて深まらない。」など発問についての悩みや、『『考えたい』『話したい』と思わせるにはどうしたらよいか。』『多様な意見が出にくい。』など協働的な場づくりについての悩みを抱えていることが分かった。道徳の授業において困り感を抱えながらも、「授業を通してみんなで考えたことが日常生活と結びついてほしい。」「学んだ価値観から『こんな人になりたい』という思いをもてるようにしたい。」「自分の行動を振り返り、よりよい自分となるために考え行動できる」児童の育成を目指していきたい。」といった願いを多くの教員がもっている。自己の生き方についての考えを深めるためには、自分自身の長所を認識し、伸ばしたい自己を深く見つめられるようにすることが大切である。

以上3点の理由から、令和6年度は道徳科研究推進テーマを「自己の生き方についての考えを深める児童の育成～道徳的価値の理解をもとに、自己を見つめる発問の工夫を通して～」と設定し、校内研究を行っていく。

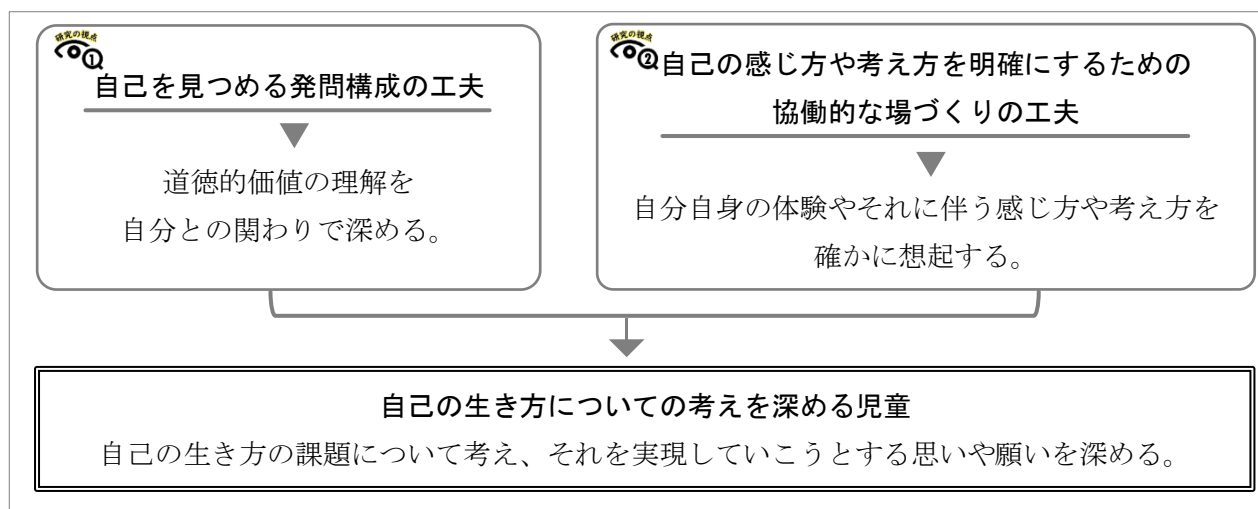
4 研究の仮説

「自己を見つめる発問構成の工夫」及び「自己の感じ方や考え方を明確にするための協働的な場づくりの工夫」を行うことで、道徳的価値の理解をもとに自己を見つめる過程において、児童は自己の生き方についての考えを深めることができるであろう。

5 研究内容

(1) 自己の生き方についての考えを深めることについて

児童が自己の生き方についての考えを深めるためには、「道徳的価値の理解を自分との関わりで深める」ことと、「自分自身の体験やそれに伴う感じ方や考え方を確かに想起する」ことが必要である。本時の自己を見つめさせる場面で、教師が意図的に道徳的価値と自分との関わりを考えさせることで、児童は自己を見つめ直すことができる。そのうえで、協働的な場づくりを意識的に取り組むことで、児童は自己の考えを明確に表出し、自己の生き方について考えを深めることにつながることを考えた。このことを教師が強く意識して指導するための手立てとして、図1にある研究の視点で検証授業を行っていく。

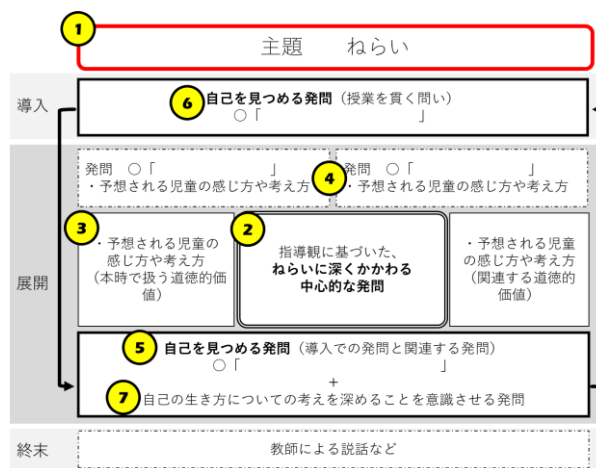


【図1 研究の視点】

(2) 自己を見つめる発問構成の工夫について

本研究では、「自己を見つめる」児童の姿を「児童が、主題に関わる自身の経験や、主題に関する感じ方や考え方を確かに想起し、自分自身と照らし合わせながら教材を通して考えを深める姿」と定義する。発問を構成するうえでのポイントは次の通りである。

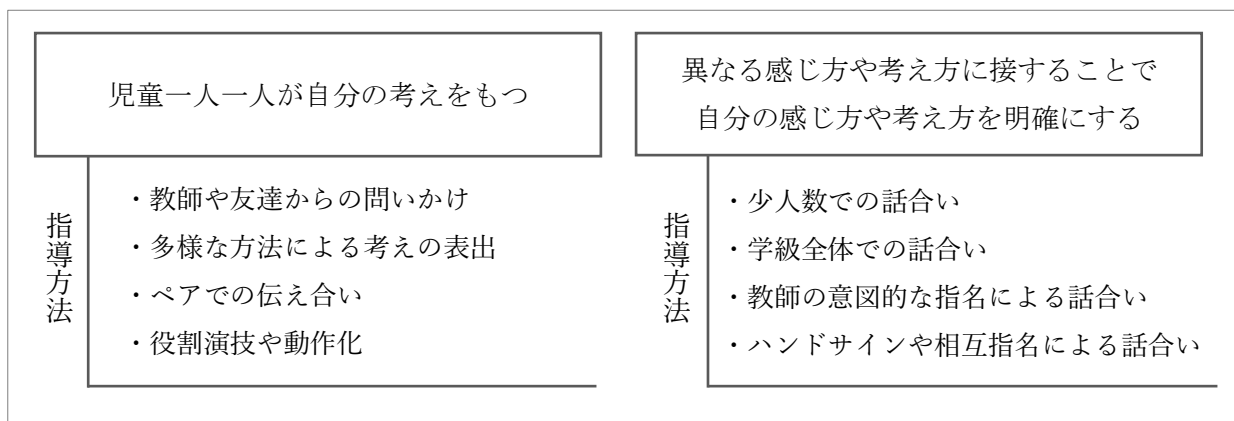
- ① 指導観を明確にし、主題とねらいを設定する。
- ② ねらいに深くかかわる中心発問を設定する。
- ③ 発問に対する児童の感じ方や考え方を（関連する道徳的価値を含む）を予想する。
- ④ 本時のねらいとする道徳的価値により深く迫るための発問を工夫する。
- ⑤ 「自己の生き方についての考えを深める」ことを意識させられるような、展開の後半での「自己を見つめる発問」を考える。
- ⑥ 導入から終末まで一貫して深く自己を見つめられるように、導入での「自己を見つめる発問」を考える。
- ⑦ 自己の生き方についての考えを深めることを意識させる発問を考える。



(3) 自己の感じ方や考え方を明確にするための協働的な場づくりの工夫について

「道徳編」第4章「指導計画の作成と内容の取扱い」第3節「指導の配慮事項」4「多様な考え方を生かすための言語活動」では、「言語は、知的活動だけでなく、コミュニケーションや感性、情緒の基盤である。道徳科においても、言葉を生かした教育についての充実が図られなければならない。」と示されている。自己の感じ方や考え方を明確にし、考えの深まりに気付きやすくするための言語活動を取り入れるためには、教師が明確な意図をもって言語活動を行うことが重要である。そこで、授業の中における言語活動を「話し合いの工夫」と「書く活動の工夫」の2点に整理し、意図的に授業で活用していく。

「話し合いの工夫」では、話し合いのねらいを「児童一人一人が自分の考えをもつ」、「異なる感じ方や考え方に接することで自分の感じ方や考え方を明確にする」の2点に分類する。話し合いのねらいに対応した指導方法を図2のように整理することで、教師が本時のねらいや指導観に応じて意図的に指導方法を選択できるようにする。



【図2 話し合いのねらいに対応した指導方法の整理】

「書く活動の工夫」では、書く活動のねらいを「これまでの自分の経験やそれに伴う感じ方や考え方を想起する」、「道徳的価値の理解をもとに改めて自己を見つめ、自信の感じ方や考え方の深まりを実感する」とする。導入と展開の後半で書く活動を取り入れ、記述を比較できるようにする。

振り返り	展開の後半での 自己を見つめる発問に対する 記述欄	導入での 自己を見つめる発問に対する 記述欄	主題名 ○○○○ 教材名 「 」
	メモ欄 (自己を見つめる 過程で感じたこと や考えたことを記 入)		

【図2 ワークシート例】